
Fate /~ Lance of Longinus~ アナザー・サイド

新田四朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / ~ L a n c e o f L o n g i n u s ~ アナ
ザー・サイド

【Nコード】

N 9 1 6 9 Q

【作者名】

新田四朗

【あらすじ】

名を「欧州神秘考古学財団」という、奇妙キテレツな組織の一員、霧島佐倉。彼女が財団に在籍している理由は、財団の馬鹿げた望みのために、どんな不可能も可能にしてしまうという聖槍を彼らに与えるため、だけである。そして、それを実行する機会が、とうとう彼女にやってきてしまったのだった。彼女は、彼女の信頼する仲間達と共に、本来人間では手に負えないものを奪い合う、死地に赴く。……果たして、佐倉はそこで何を目撃するのか？

※アナザー・サイドというタイトルが表すように、友人の夜すがら
たぬきくんの現在連載中作品（『Fate／～ Lance
of Longinus～』）を、別のキャラクター、別の視点で
描いたものです。併せてご愛読して頂けると、嬉しい限りです。

オーブニング 欧州神秘考古財団

それはいいよ空気が冷たく身に刺さるようになった、1999年12月の始めのことだった。

世間がバブル崩壊の傷を未だ克服出来ず、いや、その深い深い傷を更に深化させ、生活に暗い影を落としていたとき、関西の大都市圏にある「欧州神秘考古学財団」の東アジア総局で事は起こった。

街は、こうでもしていないとやっていられないといった風に、人々の心より先に、急速に聖夜の準備を進めている。

何の神を信仰するべきか、そもそも信仰する神を持っていたのかさえわからなくなった人間達は、イルミネーションで明るく着飾る街の気配に狂わされ、あの輝けるバブルの心を思い出そうとするかのごとく騒いでいる。

20世紀最後の月だからって、この悪夢がこれで終わり、とはならないと、皆知っているのに。

それでも、ほとんどの人々は自分でもわからない、ある種の信仰じみた狂気に乗っかっていた。

ほとんど、そう、財団の人間達は別の信仰じみた狂気のためにそうではなかったのだった。

「……えらく、急ですねえ」

20人ほどがいる会議室の末席に座る霧島佐倉——財団の若き広報課長は、上司達の無理難題に対し、手を頬に当て視線を落とすという、広報部仕込みの“女の武器”で、彼らに抗議の意を告げたが、

当然、ここにいるはそのようなことでたじろぐような者達ではない。
「そうだ。事態は絶えず、我々の一步先を行く。我々は、それに引き離されてはならないのだ」

比較的上座に近いところに座る一人が、宣告するかのように彼女に向かって言うと、他の者達は無言で頷き、霧島に圧をかけてくる。しかし、霧島も負けてはいない。

「明日の朝一でここをお発ちなさいと、今この場で告げられた私たちは、これから半日で用意してここを発たなくてはあきません。その意味、皆さん解っておられます？ 準備不足で私らが敗退したら、皆さんどう落としまいつけなはるんです？」

上品な上方訛りが含まれた彼女の物言いは、ゾツとするほど冷たく会議室に響き、コンマ数秒であるかもしれないが、確実に空気を凍らせた。

「……」

「……」

誰も何も言わない。

だんだん沈黙が痛くなる。耐え切れなくなった初老の幹部が、小さく咳払いをして、重い口をゆっくり開いた。

「……君達、東アジア総局広報三課は、そのただけに存在するのではなかったのか？ そうだ、本来総統閣下のお持ち物である聖槍を、本来の持ち主である閣下のために使われるように、この争奪戦の中で守り抜くのが、君達の存在意義ではなかったのかね、霧島広報三課長？」

その通りなのだ。そのことに今更気が付いた幹部達は、俄然強気の姿勢をとる。

「準備が出来ていないはずがない。今までの三年間はそのため期間ではなかったのか？」

「現地で調査を担っていた、広報二課はすでにお前の指揮下ではないか？ それにお前直営の三課も、大半が現地入りしているのではないのか？」

俄然強気になると、俄然色々思い出すらしい。幹部達は、肝を冷やされた仕返しとでも言うように次々と怒号を上げる。

ここは言わせておくに限ると踏んだ霧島は、会議室の一番高いところに掲げられた、財団のマークを眺める。

霧島のようにわかる人間が見たならば、その複雑な幾何学模様の中にハーケンクロイツが隠れているのがわかってしまう。そう、1950年代、復興が進むドイツで立ち上げられた欧州神秘考古学財団は、金持ちの道楽のために作られたかのように、世間では理解されていたが、他でもない先の大戦で生き抜いたナチ党員が作った、新生ナチ党なのである。そして、その彼らが言う総統閣下とは、他でもないアドルフ・ヒトラーその人である。

「もうやめい！ やめい！」

マークの下、つまり一番の上座に座っていた、本来物言わず会議を眺めているだけの老人が、大きな声を上げた。他の幹部達が、驚きと恐怖で口を閉ざす。霧島は意識を引き戻し、注意深く彼を見つめる。

「……まったく、諸君らは。それで、霧島君、君は我々の命に従えない、というわけではないのであろうなあ？」

視線だけで人を殺しかねない、老人とは思えない鋭い視線。

「当然です。命令には背けません。ですが……」

その視線に負けたわけではないが、霧島は言い淀んだ。

「しかし、現状では絶対の保障は出来ないと言いたいわけだな？」

なるほど。確かに、言い分はわからなくない」

「それでは？」

「いや、猶予はやれぬ。誰かが言っておったであろう？ 事態は我々の一步先に行く。45年の屈辱の敗戦で、我々は信奉する閣下を失い、その閣下を復活させることが可能であったロンギヌスの槍は何者かに持ち出されてしまったのだ」

老幹部は一息入れた。その当時から生きていた彼は、当時を思い出して悔しさがこみ上げて来たのだろう。手が小刻みに震えている。

「その敗戦から10年ほど経ち、過去をひた隠し、世間から成功者と呼ばれていた我々は、あらゆる望みをかなえ、不可能を可能とする聖なる槍の行方を突き止め、正しく使われるように取り戻すため、この財団を立ち上げ、ありとあらゆる方法を駆使し、今から20年近く前に、この日本にあるのを見つけ出したのだ。それからは、この地にこのような拠点を設け機会をただ狙い続けた。それはそれは、辛い辛い年月だったことよ。場所はわかっていて、手に入れ方もおおよそ見当ついていた。というのに、聖槍の方が我々に応えてくれぬ。それでもいつかは機会が来ると信じ、ずっと耐えてきた。……そして！」

老人の体が、さっきとは違う理由で、さっきより強く震える。
「今やっと、チャンスが巡ってきたのだ！ この機会を逃すわけにはいかぬ！」

思わずこのまま天に召されてしまうのではないかと、会議室にいた全員が心配してしまうほど、その声は力んでいた。誰も何も言えず、誰もこの老人から目を逸らせられない。彼は暫し空を仰いでいたが、そのままの勢いで、霧島の顔を見据えて告げた。

——霧島佐倉広報三課長、すでに伊美浜の地で行われる聖槍の争奪戦、“聖槍戦争”は始まりつつある。すぐに君も当地に入り給え。

？

「お疲れ様です」

「やっと出てきた……。長かったですねー」

霧島が会議室を出ると、長らく廊下の長いすで待たされていた二

人の部下が立ち上がり、彼女を迎えた。この部下達の名前は、そのだ蘭田空子と江碕江見。たかし えぎき えみ今これから始まるイベントで、霧島に勝利を与え
るためだけにここに居て、そのために霧島と共に血の滲む日々
を超えてきた、いわば戦友達でもある。彼女ら以外にも、霧島率い
る広報三課には10人近い精鋭がいるが、霧島とこの二人は特別親
密だった。

「ええ、長かったわー。けど、それだけ重要な話し合いやったんや
で」

霧島は小脇に抱えていた書類全てを、江碕に手渡す。受け取った
江碕は、パラパラと捲りながらその中身を確認していく。蘭田はそ
れを黙って見つめている。決して、横から覗き込まない。その作業
を全て終わると、江碕は表情一つ変えずに、一言、厄介ですね、と
言って霧島に返した。

「そうやる？ ホンマ厄介や。まだ最終調整が済んでないという報
告書を、昨日アンタさんに上げておいて貰ったのに、もう出撃命令
やからなあ……」

「なんだって？ 何故です？」

蘭田は目を白黒させて、江碕と顔を見合わせながらやれやれとい
うジェスチャーをしていた霧島に尋ねる。

「理由は言われへんかった。しかも、訊ける状況でもなかったんや
わー」

霧島は努めて明るく言ったが、三人の間に重い空気が流れる。財
団がこうして理由を黙っているときは、たいていらくでもない理由
であると、三人はよく承知しているのだ。

「……はあ、あたし死にたくないな」

蘭田は後ろで一つにくくった、背中まで届く長い髪に触れながら、
人間誰しもが思うごくごく当たり前な願いを口にした。

「……」

「……」

しかし、二人とも笑うことも突っ込むこともない。それが余計、

これから聖槍などという、本来人間の手に負えない究極の願望機を奪い合う死地に、自分達が赴くのだということを三人に痛いほど意識させていた。

その時、彼女らの心の中には何が思い浮かんだのか。

時が満ちた今、新たな物語が始まる。

誰も知らない運命（f a t e）の物語。

人はその力を恐れ、厭い、しかし欲す。

禁忌の聖槍「ロンギヌス」を巡る戦いの勝者は誰か。

答えは運命だけが知っていた。

第一話 魔術師、戦地に赴く

あのクソだるかった、訂正、重要で大変時間のかかった会議が終わってから、かれこれ15時間以上過ぎて、今は朝の九時。私達は必要なものをわんさか積んだワゴン車で、聖槍戦争の行われるN県伊美浜に向かっている。

「すー、すー」

リクライニングをフルに倒した空子が、規則正しい寝息を立てて眠っている。珍しいこともあるものだ。起きている間ずっと騒がしい彼女は、普段ならば、寝てる間も騒がしく、周りから迷惑がられているのだが、さすがに今日は準備で疲れ果てているようだ。さっきから、物音一つ立てないで……

「あう！」

……と思った端から、鈍い大きな音と、その音に負けずとも劣らない大きなうめき声が車の中に響いた。どうやら、狭い車の座席で寝返りを打って、どこかに頭をぶつけたらしい。

「……今更ながら、やっぱりこうなるんですね」

ハンドルを握っていた江見さんが、冷静にツツコミくを入れる。

「そやね。アンタさんと全く同じことを思ってたわ」

私は思わず笑う。

車に乗ってからはずっとこんな感じで、後部座席で空子が爆睡し、運転席の江見さんと補助席の私が、他愛のない会話を時々思い出したように交わしている。まるで、学生の頃の遠足の帰りのような、暢気な空気だ。内ポケットにいられた、私の魔術礼装である懐剣の重みさえなければ、私はもっと気楽にしていただろう。

この懐剣は、魔術師である私にとっての魔杖、つまり所有者の魔力を上げたりするサポート魔法具だ。私の最初の師でもある父が、18歳で単独、本国に渡ることになった時、私に授けてくれたものである。

……それから七年間も経ったと思うとゾツとする。どうりで最近、この頃の若い子は、などと思うようになるわけだ。

「はぁ……」

「うん？　どうかしましたか？」

「あー、大したことやないんやけど、時の流れって怖いなあ、と思ってもうてね」

「ええ、そうですね」

江見さんは、今ひとつ理解しかねるという風に一度言った後、もう一度、今度は納得が言った、という風に、そうですね、と口にした。

「四年前、私は財団の秘書課に就職したのに、気が付いたら広報部に配属にされて、行った先の広報三課は、広報とは名ばかりで、実の仕事はいわゆる諜報任務、つまりスパイ任務でびっくりしたのが懐かしいです」

「しかもその上司、始めの自己紹介で魔術師やと名乗って、更にびっくりやったんやろ？」

私は、可笑しいのを隠さずに江見さんに問いかける。江見さんも、人事に能面のようなだと評価される普段の彼女からは、想像もつかないようなニヤリ顔をする。

「ええ、そうです。更に、今後ろで無防備に寝てるのまで、自分は魔術師だって……。もったも、一番びっくりしたのは、私以外の全員がさも当然という体でいたことでしたが」

私達は笑い声を上げる。

元々財団の広報部は、裏社会に通じる諜報組織を内包しているのだが、そのことに特化し、実際の執行部隊として編成された一つが、私達広報三課である。当然、三課に集められた要員13人は、ほぼ例外なく裏事情に詳しい腕の立つ諜報員だった。しかし、例外のないルールこそ例外である、という言葉があるように、ここにも例外がいて、その唯一の例外が、魔術師とも裏社会とも接点のない秘書課から転入した江見さんだった、というわけだ。

「最初の頃は、アンタさん、ずっと驚きっぱなしやったもんな」

「ええ、おかげさまで、大抵のことでは動じなくなりました」

江見さんは頼もしい笑みを浮かべた。元々秘書課だった彼女は、今では他の三課要員では処理しきれない書類仕事や事務仕事で如何なく才能を発揮し、私の大切な片腕になっている。上は何を考えて、江見さんを三課に入れたかわからないが――冷静に考えれば、恐らく見張りなんだろうけれど、彼女は今や三課にいないては困る一人になっている。

その大切な片腕に、後どれくらいか尋ねようとした時だった。

「伊美浜まで後何分くらい？」

さっきまで目を瞑り寝ていた、私のもう一本の片腕――空子が、運転する江見さんに声をかける。

「もう伊美浜の町には入っている。後、数分といったところだ」

「そんなもんか。じゃあ、起きとこー」

空子は体を起こし、上半身だけを前に乗り出して、バックミラーを使って乱れた髪の毛を直す。彼女の髪の毛は本当に長く、腰の辺りまで届いている。私が始めて彼女に会った時、まさに緑の黒髪とはこういうモノかと感動したのを、今でもよく覚えている。本人は知らないだろうけれど、あんまり手をかけてる風ではないのに綺麗に保たれているのは、三課全員の疑問だ。

「それにしても、さすがは魔術師の端くれだな」

江見さんがバックミラー越しに空子を見て、不思議なことを言った。空子も真意が掴めないらしく、手を止めて聞き返す。

「うん？ それはどういうことだ？」

「霊脈だとか言うものを感じて起きたんじゃないのか？」

空子はしばらく驚いた風に固まっていたが、しばらくすると再び手を動かした。

「ああ、なるほど。けどお生憎様。半端者のあたしには、霊脈を感じするような能力はないぞ。目が覚めたのは、単に腹が減っただけだ」

そう言って、空子がははと明るく笑い、長い髪を後ろで一つにくくった。私も釣られて笑ってしまう。

が、ふと、横目で江見さんを見ると、苦りきったような、渋い顔をしている。またこんな顔をするのも珍しいなあ、となんとなく眺めていると、その視線に気が付いた江見さんが、どこことなく棘のある言い方で、なんでしょうか、霧島課長？ と尋ねてきた。

「いや、なんもないで？」

江見さんがわざわざ“霧島課長”と私のことを呼ぶとき、そこを突つくと面白い反面、痛い目にも会うと、付き合いの中でいい加減学んできたので、慌てて他の話題にする。

「ところで、空子。起きたついでに聞くけど、刻印は馴染んでるん？」

「まあ、一応は」

空子は右の袖を捲って、財団を出る前に移植されたばかりの魔道刻印を見せてきた。

魔術刻印というのは基本的に、一門で伝える、その魔術師一族の研究成果を凝縮した入墨のようなものだ。私には、父から受け次いだ霧島の歴史そのものといえる印が、右の脇の下に大量に刻まれている。この印、一つ一つが、あるいはそれ全体は、永遠不滅の魔術式であると同時に、先人達の足跡なのである。

しかし、やはりこれにも例外があって、術式としての側面だけを模倣して作られた劣化コピーと言える、消耗品の魔術刻印が存在する。空子にはその複製品が、必要に応じて財団で移植されているのだ。なぜ彼女に一族の刻印がないかというと、魔術師の家では普通、魔術というのは一子相伝であり、兄弟がいれば、どちらかを後継者として選び、選ばれた者にのみ一族が伝える魔術を教え、選ばれなかった子は、他の魔術師の家に養子として出されるか、なにも知らせないまま育てられるかになる。それで後継者には選ばれず、養子にも出されなかった空子は、家族に魔術を教えてもらったことはなく、当然本来の刻印など受け継いでいない、というわけだ。

「本当なら二日かけて、八本入れる予定やったのに……」

彼女の右腕には5本しか入っていない。思わず、唇を噛む。

「まったく、上の連中、何を考えてんすかね？ あたしらに勝って欲しいんじゃないのか？ って、話だ」

空子は息巻いて、左の袖も捲くる。朝方のせいか、暖房をつけていても窓越しに冷気が入ってきて、それほど車の中は暖かくない。それで、思わず聞いてしまう。

「寒くないんか？」

「ううん、寒い。けど、腹が立ってるから」

「おかしな奴だ」

なんやそれは、と言う前に、やっと表情を戻した江見さんが、私以上の綺麗さで一刀両断にする。

「……もうちょっと言いたい方あんだろ」

言われた空子は大げさにため息をついて、なあ？ という風に私に視線を送る。私はそれに対し、少し肩を竦めてやった。

空子とは大学生の頃からの付き合いで、共に考古学を専攻していたのだが、数少ない同じ国の出身者ということもあってか、先輩後輩の関係でありながら、よく一緒に過ごしていた。ある日、彼女の家が魔術師の家系であるのにたまたま気が付いて、今となっては、何故そんなことをしたのかわからないのだけれど、本当は駄目なことでだと承知で、彼女にそのことを伝え、興味を持った彼女に駄目元で魔術を教えたのだ。その結果、予想外に才能を開花させ、今では私の優秀な部下になっている。

「二人ともひでえなあ」

「そうかもしれないな」

「そうかもな、って江見りん、本当にお前は鬼畜だあ！」

「わざわざ人が嫌がる呼び方で人を呼ぶほうが、よっぽど畜生だ」

「だって、これ言いやすいし。なんか、広がってるし。アーベル係長だって使ってるし」

「……アーベル係長は、色々と特別なんだ」

「なんなんだよ、それー」

「特別は特別なんだ」

そろそろ止めないと、また江見さんに霧島課長と呼ばれかねないので、なにか話のネタはないかと思っていると、魔力の溜まり場――霊脈上に立つ立派な洋館の尖塔が目についた。見た感じ、写真で見たとこの戦いの間、私達が根城にする建物そっくりである。

「さっきから、特別、特別ってよく」

「だからだな！ 係長は……」

「江見さん？」

「はい、なんですか、課長？」

凄い速度で反応する江見さん。

「あ、クソ」

何故か凄い悔しそうな空子。その声を無視して、江見さんに尋ねる。

「江見さん、あの建物が私らの拠点？」

「ええっと……そうですね。屋敷に連絡入れます」

江見さんは車に備え付けてあった無線機で建物に連絡を入れる。

「おわ、すげえ。バブル期の置き土産みたいだな」

洋館を見つけた空子が、子供のように瞳を輝かせている。

「そやね。あんなステンドグラスまで使って……」

私は魔力で視力を底上げし、洋館の隅々を確認する。だが、よく目を凝らすと、あんまり見たくないものまで目に入ってしまうのは必然なのかもしれない。

「ん？」

「ん？ って、どうしたんです？」

「見てみ。車、止めてある」

私の目が、門の前に財団関係者がよく使うドイツ車が止めてあったのを、めざとく捉えてしまったのだ。本部を叩き出された後だけに、言葉にし辛い不安が私を襲う。

「ホントだ。いったいどこの連中なんだろう？ あのナンバーは……」

「おいおい、うちの一课のじゃねーか」

「……嫌な予感しかせえへんな。広報一课の誰が、なんでこんな場所まで足を伸ばしたんやろう？」

私が考え込んでいると、通信を終えた江見さんが、その答えを口にした。

「どうやら、川崎係長みたいです。用件は、何かしらの荷物の引渡し、だとのことで、現在、アーベル係長が相手をなさっているそうです」

「……そういうことなら、多分あれやな」

私は用件がわかって、少しホッとする。

「それで、荷物運びはどないするん？」

「荷物は私が指示して、館付きの雑用の者達に運ばせるので、課長達は、先に上がって下さい」

「ありがとさん」

そんなことを言ってるうちに車は門の中に入っていく、出迎えの者がいるところで止まった。

「じゃー、お先にー」

車が止まるやいなや、空子がドアを開けて車から飛び降り、おもいきり伸びをする。私も降りようとした時、重要なことを思い出す。

「江見さん、しばらく何もないやろうから、積荷降ろし終わったら、しばらく割り当てられた部屋で仮眠しててええで。昨日の朝、目覚ましてから、一睡もしてへんねんやろ？ 倒れられたら困ってまうから、休めるうちに休んどいてな」

「……わかりました。昼食時まで仮眠を取らせていただきます」

江見さんはしばらく悩んでいたが、最終的には首を縦に振ってくれた。

●

セオリーに従って、真つ先に私達が根城にするこの洋館のあちこちを確認したのは山々なのだけれど、用事でここまで訪れた他の課の人間を無視するという非礼は、私にはできない。屋敷付きのスタッフに、川崎君のいる場所を案内させると、そこは会議室のようなだ広い部屋だった。中に入ると、川崎君と私達三課の係長であるアーベルが、なにやら楽しげにお喋りしていた。

「ちよっとお邪魔すんで」

「おお、サクラ、やっと来たのか」

「霧島課長、お久しぶりです」

二人ともさつと椅子から腰を上げて、直立姿勢をとる。財団では、こと財団のSS^{エリート}気取りの広報部では、こうやって上司を立てて迎えるのが徹底されている。

「楽にしてや」

私は、二人の近くの椅子に腰掛けた。それを見届けてから二人は腰掛ける。更に、その二人を見届けてから空子が私の横に腰掛ける。「それで、なにを楽しげに話していたん？」

「一課の近況を聞いていたんだ」

アーベルが笑顔で答える。

「アンタさんは、三課に来る前、一課所属やったもんな」

「そうとも。私は本国の命令でこの国に来てからというもの、よくわからないまま広報一課にて、厄介ごとの後始末ばかりしていたんだ」

「流れで一課の係長にされて、火消しばかりさせられてたっていう噂やったけど、それってホンマやってんなあ」

「流れというか……まあ、流れだな」

「あれは完全に流れですよ、姉^{あね}さん。だって、僕が貴女の後釜の係

長になった時、慣例に従って前任者の移転完了報告を行おうとしたら、あなたが本国から広報一課に配属されたことを示す正式な書類がなくて、手続き苦労したんです」

「そうだったのか？ 自分のことながら、驚きだ」

「ホント、アベールは謎が多いなあ」

「というか、謎しかないですよ」

私、いや私らの頼もしいこの係長は、本当に謎ばかりの人物なのだ。本人曰く、元々東ドイツの秘密警察シュタージかどこかの要員だったのだが、東・西ドイツ合併で職を失って、財団に拾われたんだという。日本語は財団で必要だと知り、その時覚えたというのだが、あまりに巧みで実際はよくわからない。冷戦時代、日本に関するスパイ活動に従事していたのかも、というのが専らの噂である。ちなみに、名前は嫌いだからと教えてくれず、仕方がないので名字であるアベールか、そうでなければ役職の係長、あるいは、あだ名の姉さんだとかで呼ばれている。

「……そういや、謎で思い出したんすけど、川崎、あー、係長」

今まで、黙って室内装飾を目だけでできよろきよろ見回していた空子が口を開く。

「係長が言い辛いなら、無理につけなくて良いよ、蘭田。監視役じゃないんだし」

空子と川崎君は同期なのだ。

「そんじゃ川崎。なんで、車を外に止めてあったんだ？」

「ああ、そういえば、そうだったね。では、霧島課長もおいで下さいましたし、そろそろ本題に移らせてもらいます」

川崎君の表情が引き締まる。

「それは、私らがいても良いのかな？」

アベールが立ち上がり、空子に目配せするが、川崎君がそれを留めた。

「すぐに終わるから別に良いですよ。というか、荷物の引渡しだけなので、すぐ終わらせるつもりで車を外に置いておいたんです

から。……もつとも、霧島課長が不在で叶いませんでしたが。それに、むしろ係長である姉さんと、生粋でないにせよ魔術師である蘭田には、これが魔術に関する重要物であるならば見たい欲しいですし」

「そうか」

アーベルは一度立った椅子に再び腰を下ろす。川崎君はそれを見届けると、足元に置いていた、風呂敷に包まれたお重箱のようなものを、しごく大切そうに机の上に置いた。

「課長。この中に貴女の触媒が入っている、とのお話です」

「そう、こん中に」

自分の顔が綻ぶのを感じる。

「開けて良いんか？」

「その前に、これに引渡しサインを。なんでも総統閣下のコレクションから持ち出してきたらしくて、責任問題が大変なので」

「それは確かに大変だな。……ここに署名すればエエんか？」

「はい。IDもお願いします」

ボールペンを取り出し、焦る気持ちを抑えて自分の名前とIDを渡された書類に書く。

「これで結構です。それではどうぞ」

川崎君が私の前に風呂敷を置いてくれる。出来るだけ平常心を装って、風呂敷に手を伸ばしそれを披けると古ぼけた木箱が出てきた。歴史のある陶器や茶器の入れ物によく似ているが、それらよりも一回りも二回りも大きい。

「魔力の流れは感じないけど、総統閣下の持ち物だったってことはかなりの曰くがあんだろうな」

空子が喉を鳴らして見守る。

「そうやろうね……。ドキドキするわ」

そんな空子と私の様子に当てられたのだろう。恐らく触媒とは何なのか、今ひとつ理解出来ないはずの、アーベルや川崎君まで緊張した面持ちで、奇妙な木箱を見つめている。

「これを上にスライドさせたら、開くみたいやな」

本当にこの入れ物は日本や中国の骨董品のようだ。こういう骨董品に関係ある英雄なんて居たのかしらと思いつながら、溝に嵌った、仕切り板を勢いよくかつ慎重に持ち上げる。

「……ん？」

序列なのなんだのは忘れて、立ち上がって中を覗き込んでいた空子が、驚いた顔のまま固まった。私も釣られて中を見る。

「えっ？」

そして、私も空子と同じ様に言葉を失う。なんと中に入っていたのは、馬の頭骨だったのだ。

「私の私感だから、間違っていたならば指摘して欲しいんだが、この鼻が長い頭骨は、馬の頭の骨だよな？」

その中身に気が付き真つ当な疑問を口にしたアーベルに、なんとか答えようとしたが、かなりの衝撃だったせいか、声が出せない。

「まさか馬の骨を運ばされていたなんて……！」

触媒が何かよくわかってない川崎君は川崎君で、別のところに衝撃を受けている。

「全く、凄い不意打ちだな。色々」

アーベルが左手で頭を掻きながら、右手で前傾姿勢のまま硬直していた空子の肩に手を置いた。それで、空子は氣を戻したらしい。体を起こすと、一度思いつき深呼吸して嘲るように口を開いた。

「ったく、リアル、どこの馬の骨だぜ、これは！　なんだよ驚かせやがって！」

その声を聞いて私もようやく自分を取り戻す。

「……これはただただびっくりやな」

どっからどう見ても間違いない馬の骨。改めてよく見ても種類だとかは皆目見当つかないが、この馬の骨、心なしかなんだか笑っているように見えてくる。無性に腹が立つので、もうこれはしばらく見ないでおこうと心に決め、板を元通りに下げて、風呂敷をくくり直す。

「で、他には何か？」

「これ、部長からの手紙です」

いくらか気を落としたように見える川崎君から、嚴重に封印された手紙を受け取る。

「手紙？」

たいていのことは電子メールでやりとりしているのに、なぜ手紙なんか？ という疑問を押さえて中を開けて見ると、所属および氏名不明のマスターが、一人本国から送り込まれるという、すでに連絡受けた内容に続いて、ソイツには気をつけろというような内容のことが書かれていた。部長の真意は不明だが、他の財団員に見られると不味いものであるのは違いないだろう。

「空子、灰皿とライター。これ燃やすさかいに」

「了解」

空子が手際よく用意して灰皿の中で手紙を燃やす。パチパチと景気の良い音をさせながら、それは黒く変色していく。

「これでもう、なんにもないねんね？」

「ええ、それでは帰ります。……と、言いたいのですが、触媒ってなんなんですか？ 何故、僕が馬の頭骨なんか運ばされてたんです？」

川崎君の目は必死だ。案外、嫉妬深い性質たちなのかもしれない。

「私も知りたいのだが」

アベールが挙手をする。私はしばらく考えた後、軽く話をすることにした。

「三課のメンバーには後から詳しく話をする予定なんやけど、まあエエは。ちよつと聞かせたる。……私らはロンギヌスの槍を奪い合う聖槍戦争に参加することになってるんやけど、その聖槍はどんな望みも叶えるモノや、っていうのは理解してはるわな？」

「ええ、当然です」

「広報部員なら誰でも、その聖なる槍の存在と、それを巡る戦いが行われることになるということは、更に、そのゲームのルールはフユキの聖盃戦争とそっくりだ、ということくらいは知っているだろ

う。なんせ、聖槍を手に入れるためだけにあると言っても過言ではない組織だからな」

「それもそやね。それやったら、セイバー、ランサー、アーチャー、キャスター、バーサーカー、ライダー、そしてアサシンの七つのリンクに該当する英霊が、聖槍に選ばれた七人のマスターにそれぞれ一人ずつ与えられる。マスターは、使い魔と呼ぶには強力過ぎる使^{サー}い魔^{ヴァント}を使役して、最も望みを叶えたいと思っているのは自分やと聖槍に誇示して――つまり他のマスター達を蹴落として、最後の一人になってやっと、聖槍の恩恵に浴すわけや。だから強力なサーヴァントをマスター達は欲す、っていうのも当然理解出来はるわな？」

二人とも無言で頷く。

「この時、聖槍によって割り当てられるサーヴァントは、マスターに関係してたり、人間的に近いのが引き付けられるんやけど、もしマスター自身に関係がないんならないで、関係するモノやシンボルを用意すればええやろ？　それが触媒やねん」

川崎君が難しい顔をしている横で、アベールがポンと手を叩いた。「本来その人では呼び出せない強力な英雄を、遺物で釣り上げるわけだな？」

「まあ、そういうことやな。その釣り上げるための遺物のことを触媒なんて言うわけやね。……川崎君、わかった？」

「……まあ、なんとか。とりあえず、これが歴史上の英雄に関する物だとは理解出来ました」

「そうそう、それだけわかれば、にぶチンのお前にしちゃあ、十分さ」

手紙が焼えるのを眺めていた空子が、横からからかう。

「蘭田はわかってるのかい？」

「当然。私だって魔術師の端くれだかな」

「うっ……」

川崎君は一度言葉に詰まった後、なんでもなかったように、私に尋ねる。

「この触媒、馬の骨ですけど、どんな英雄と関係してるんでしょうかね？」

「あ、逃げた」

空子が、露骨に非難の声を上げるが、川崎君が可哀相なので、非難を無視してやる。

「馬の骨やから、騎乗の英雄やろなあ」

「騎乗の英雄か……」

アベールが複雑そうな声を上げた。

「につききナポレオンだったら、私はさっさと降りるからな」

「英雄だとは認めているんやね、一応。でも、どうやろう？ 閣下がナポレオンの関係物を自分のコレクションに加えてるとは思えへんけどなあ？」

「それはわからんぞ。総統は魔術師だ。それも時計塔というのか？ 魔術師たちの協会を嫌って、それに対抗する魔術師達を組織化してしまったほどの魔術師だったんだろ？」

「ええ、そうや。閣下は、カリスマ的な政治家であると同時に、偉大な魔術師やったそうや。ほんで、欧州中、否、同盟国の力を借りて、世界中の魔法具を収集しようとはした。だからこれも、大陸進出を果たした日本から送られたもんちゃう？ 入れ物やって、東アジアの骨董品が入ってそうな木箱やったし」

「そういわれたら、そうかもしれない。だが、万が一の時は……」

アベールは腕を組んでこちらの顔色をチラチラ伺う。頼み事をするときの、彼女の癖だ。

「……万が一の時はな。とりあえず、これは夜まで放置しとこか。どっか良い保管場所は……」

「地下に武器庫がある。そこなら人が近づかなくて良いだろ」

「へっ、武器庫？ そんなのあったんすか？」

アベールの言葉に空子が食いついた。

「ああ、各種小火器と、その弾薬のストックは完璧だった。後で見に行くか？」

「当然！　なにがあるんすか？」

「H&K MP5SDに始まって、モスバーグ・モデル500ライオット・ショットガン、ワルサー・モデル93スナイパーライフル、さらにはドイツ連邦軍で配備が始まったH&Kの最新型ライフルG36もあったぞ」

「なんつーか、凄いつすね！　G36ってどうでした？」

「ほとんどのパーツがプラだから、最初不安だったが……」

盛り上がる銃器好き二人組み。その横で、川崎君が私に尋ねる。

「幽霊相手に、鉛弾なんか効くんですか？」

「いんや、全く効かへんで。けど、意味はある」

「はあ」

「あんなあ、サーヴァント達は、マスターという寄り代のおかげで現実世界に存在できんねん。逆にマスターという寄り代を失ったサーヴァントは、いくら優れててもこの世に存在しつづけることは叶えへん」

「なるほど。つまり、マスターを排除されると、そのマスターのサーヴァントは、排除されたも同然になるわけですね？」

「そういうことや」

「……そして」

武器話で盛り上がっていた様子だったアーベル達が、こっちに口を挟む。

「そして、英霊などという怪物を倒すのは、いかな優れた魔術師でも、同じ英霊でも骨が折れるから、この戦いは結局、マスター同士の殺し合いになる。我々三課に与えられた任務は、サクラが他のマスターによって殺されるのを防ぎ、可能であれば、他のマスターを殺害することなんだ」

「結局、自分の望みを叶えるために、他人の望みを潰すだけじゃ飽き足らず、ソイツの命まで奪い取る。それが聖槍戦争っていうやつなわけだ」

「……なるほど」

川崎君の顔が険しくなる。訊かなくてもいいことを尋ねて、余計なことまで聞いてしまったのを、少し後悔しているのだろう。

「……それでは、僕は本部に帰ります。長居してすみませんでした」
彼は厳しい顔のまま部屋を退室した。それを見届けてから、アベールが口を開く。

「それで、これからどうするのだ？」

「そうやね……。まずは、遅い朝ごはんでお腹を満たさんとね」

「さっきまで忘れてたけど、あたしもうぺこぺこで死にそう」

「では、二人分の朝食を、課長執務室に運ばせる。その時に、各担当者を召喚させるぞ」

「そうして頂戴。それから、その後腹ごなしにここ案内してもらってから、少し外へ散歩に出かけるから、車用意しといてくれへん？」

「わかったが、どこに出かけるんだ？ 霊脈上にあるとかいう、例の廃ビルか？」

「廃ビルって、二課が管理下に置いてるやつのことかいな？ ……」

いんや、神社に行こうと思うとるんやけど」

アベールも空子も露骨に驚いた顔をする。

「正気か？」

「正気やで」

「……」

アベールが空子に視線を送る。彼女は私達が大学時代からの知り合いで、互いによく理解しあってる仲だと知っていて、私の意図が掴めないときはこうして、空子を頼るのだ。

「うーん」

もっとも、今回ばかりはその空子も理解していない様子である。

アベールはやれやれという風に、首をすくめた後、わかった、と短く言って、例の馬の骨が入った風呂敷を持ち上げた。

「これは、武器庫に運んでおこう」

遠ざかっていく頼もしい背中に感謝の言葉を述べる。

「よろしゅう」

その背中が部屋の外へと消えた時、私は少し疲れた気分になったが、今から始まるのだから気を引き締めねばと自分に言い聞かし、椅子から立ち上がる。

「とりあえず、執務室まで行って、ごはん待ってところか」
「了解！」

私の片腕も同じ事を思っていたのか、勢いよく頷いて、力強く立ち上がった。

第二話 魔術師“敵”と出会う

第二話

「ホントにあの神社、行くの？」

空子が不満げに、私に声をかけてくる。

「ええ、本当に行くで。……さっき言った通りの装備をしてきたなあ？」

「そりゃあ、もちろん。スローイングナイフ十二本、財団支給のアーミーナイフ二本、それに拳銃一丁と予備マグ一つ」

「そう。そんなら、問題はなんもないね」

空子はむー、と拗ねたような表情を見せたが、私はそれを無視して玄関へと向かう。空子はしばらくその場に立ち尽くしていたが、私がずんずん先に行くと、慌てて無言で追いかけてくる。そんな感じで二人で玄関へ行くと、そこにはすでに準備を整えたらしいアベールが、最新の二つ折りの携帯電話片手に私達を待っていた。

「遅うなつて、ごめんなあ」

「別に構わないが……」

アベールは何か思わせぶりに言葉を切ったが、それも無視して外へ出る。すぐ外にある、小さいながらも本格的なロータリーには、すでにエンジンのかかった四人乗りの車が用意されてあった。運転席では、三課員でアベールの現在のバディである奥山さんが、髭を生やした顎をハンドルに乗せて待っていて、曇ってきた空をぼんやり眺めている。

「霧島さん、どうぞ」

車に近づいていくと、車の側に立っていた屋敷付きの可愛らしい女の子が、後部座席のドアを開けてくれる。

「ありがとう」

「蘭田さんどうぞ」

「さんきゅ」

一言礼を言って中に入ると、奥山さんはやれやれという様子でバツクミラーを通して私達を見てきた。

「遅うなって、すいませんなあ」

私の謝罪に対し、奥山さんはいつも通りに気がないような返事をする。

「構わん」

相変わらず無愛想な人だ。

「そう、ですか」

あまりに会話が続かないので、私は質問をする。

「奥山さんが運転してくれるはるんです？」

我ながら中々間抜けた質問だ。

「そうでなければ、私は運転席に座らない」

奥山さんはそんなふざけた質問をめんどくさそうに答えて、もう会話は終わりだという風にハンドルに手をかけた。年齢的にはアベールよりも年上で腕も確かなのだが、この無愛想さの故に上に嫌われている。

「久々ですけど、奥山さんは相変わらずですねえ」

私は奥山さんに聞こえるか聞こえないかの声でこちたが、彼は私の言葉に反応せず、チラリと私達に一足遅れて助手席に乗り込んだアベールに視線を送る。二人は数秒目だけでやり取りしていたが、結論がついたらしく、アベールが上半身だけをこちらに向けて、私に話しかけてきた。

「……後でバレることだから先に言っておくが、私達の独断で二課の兵隊を動かした」

「二課の兵隊というのは、戦闘ユニットのことかいな？」

「ああ、そうだ。待機中だった戦闘ユニット一個を武装させて、常駐の監視部隊とは別に神社周辺に配置させた」

アベールは頷く。

財団の広報部の人間のうち、裏の仕事を主に担う要員は、その役

割ごとに一人〜五人ほどでユニットを編成していて、普段はそのユニットを基本単位に活動しているのだが、大きな仕事になると、いくつかのユニットがより強い結束をもって、より柔軟に任務遂行を果たさなくてはならない。そのような時に、必要なユニットが本隊である一課から選出されて、一課以外の課を作って活動を行う。それが、二課や三課なのだ。二課は、伊美浜で聖槍の動向調査を専門にしている、今現在も30人近い大所帯でその任務を続行している。私達三課は、彼らが集めて分析した情報がなければ行動できない。

ちなみに、私達三課は、空子と私、そして私達のサポートという形で加えられた江見さんの三人で組んでいる、三課の核となる魔術師ユニット、私達や屋敷の警護を主任務とする、アベールや奥山さんの所属する戦闘ユニット二個に、二課や本部と情報をやり取りするための通信・分析ユニットの計13人で構成されている。ついでに言うと、屋敷付きのスタッフは広報三課の隷属とされていて、三課の指揮下でありながら三課の人間ではない、という複雑な扱いだ。その多くは、財団の運営する孤児院で育てられ、財団が格別欲しがる特殊な能力を持っていなかった青少年少女だろう。

「サクラ？」

「うん？」

アベールが自分の顔を、私の顔にぐっと近づけた。

「私の話を聞いていたか？」

「勿論や。アベール達の独断で、二課の要員を神社周辺に展開させたんやろう？」

「わかっているなら良いが。それで、彼らの配置は……」

アベールはそう言って、ダッシュボードに入ってあった地図を取り出し広げ出す。

「散歩やと言ったのに、もののものしいことになったなあ」

私の口から、つい本音が零れ出る。

「当然だ。あの神社には魔術協会の処刑人がいるんだから……」

「処刑人って」

アベールは息巻いたが、今まで無言だった空子が、やれやれという風に呟く。

「なんだと！」

その呟きは届かなくても良かったのに、アベールの耳に届いていたようだ。厄介になる前に私が止めなくてはならない。

「まあ確かに、あの神社にいる謎の巫女は土地管理者セカンド・オーナーの代わりに、協会から派遣された人間のようや。けどな……」

とりあえず私の口から説明しようと思っていた矢先、さっきまで何も言わずに聞いていた奥山さんが、唐突に口を挟んできた。

「おい、車を出すぞ。……あんまりもたもたしていると、昼食に遅れる」

「……」

「……」

「……ぷっ」

一瞬にして車内の緊迫感が吹き飛ぶ。空子にいたっては吹いていた。

「……そうですね。奥山さん神社にお願いします」

私が笑いを噛み殺しながら奥山さんをお願いすると、彼はやはり無言で聞き届け、車をゆっくりと発進させた。私はいくらか表情の緩んだアベールに問いかける。

「10分くらいで着くんやねえ？」

「ああ、それくらいでつく」

「そうかいな」

私は、アベールと話すために前のめりにしていた体を起こして、背もたれに身を預ける。そして、さっきまでとは一転して表情を引き締め、有無を言わさないように強い口調で命じた。

「……奥山さん、今日は神社に散歩、もとい現状把握をしに行くだけやから、参道の前に車を止めてください。それから、アベール係長、私は蘭田と二人で神社に入るんで、貴女方はこの車の中で待機しておいて下さい。貴女が呼んだ二課要員も、場所は任せるんで、

神社から少し離れた所に止めた車の中で、待機させておいて下さい」
アベールは少し迷った後、広げかけていた地図を再び小さく折りたたんで、ポケットから携帯電話を取り出し、私の顔を見ずに了解の意を伝えた。やはり、納得いつてないようだ。だけれど、命令は絶対に聞いてもらう。

「お願いします」

私は誰かが見ているというわけでもないのに、出来る限りの笑顔を作ってそう言った。

それが余程不気味だったのだろうか。私の横顔をチラリと見た空子が、ぶるぶるっと体を震わした後、窓の外へと視線を向けていた。

＊

あれからというものの、誰も何も言わない。空子もアベールも何か考えている風に外の景色ばかりを眺めている。さつきから、かちやかちやと音がするのは、アベールがポケットに入れた中型自動拳銃^{オート}の撃鉄を起こしては、デコッキングして元の位置に戻している音だろう。

私は改めて神社に関する報告書を読み込む。作り、人間、歴史……。もう何度となく読み込んだおかげで、今ならそらんじれる気がする。こと、神社にいるある巫女の説明なんかは完璧だろう。……。まあ、そこにある記述が、極端に少ないおかげもあるけれど。

神社には魔術協会の処刑人がいる、アベールはそう言った。そう、例の神社のある巫女は、本来の土地管理者の代行として魔術協会から認められ、彼らの意向に従わない魔術師を処分する権限を与えられた魔術師だ。

魔術協会——それは時計塔^{ロンドン}に拠点をおく、魔術師達の秘密結社の

ことである。彼らは根源の渦、まあ、わかりやすく言うと、この世界を形作った、始まりの力を目指すと同時に、一般社会から魔術とそれを操る人間の存在を秘匿することを目的としている。

魔術を秘匿することへの協会の徹底は異常で、魔術師が表社会に姿を表さないのは協会の粛清を恐れているからだ。そして、防犯のお巡りさんよろしく魔術師達を監視しているのが、本来は霊脈の管理を主任務とする、土地管理者と呼ばれる協会会員の魔術師達である。もつとも、中東地域は現在の西洋中心の協会と反目していたりと、協会の支配は全世界に満遍なく行き届いているわけではない。

とは言えども、やはり魔術師達にとって、厄介な存在である。魔術師ヒトラーも疎ましく思い、自身と同じ様に協会を苦々しく思っていた魔術師を集めて、対抗する組織を作り上げると共に、彼らに自らの野望に協力させ、協会の破壊を副次的な目的にして、世界に戦争をふっかけたという。更に、それを見た日本は日本で、国益を掲げて国内の魔術師の一部を協会と手を切らせ、先の大戦で協力させた。戦後、欧州神秘考古学財団は、そういった協会から追われる立場になった魔術師達の受け皿になり、私、霧島佐倉も、霧島の家を守るため、父の代からこうして財団に媚を売って協会から逃れている、という次第なのである。

そういう意味では、周りが心配するように、魔術協会に所属する巫女のいる神社になど近づくべきではないのだろう。普通なら私も止めるだろう。そう、普通なら……。

「雨、降りそうだ」

空子がいきなりため息混じりに言った。彼女の言葉通り、朝、私達が伊美浜についた時、晴れていたのが嘘のように、暗い色をした雲が一面空を覆っている。

「まだ、降らんで」

「そうなの？」

「そうや」

「ふーん。よくわからんけど、先輩がそう言うなら間違いないね」

「そうやで、なんせ私は霧島の魔術師やからな」

私はそう言うってから、近くに霊脈があるのを感じ、私の魔杖である懐剣とはまた別の魔術礼装である短剣を、バックから取り出しベルトの帯刀具に装着する。

「奥山さん、もうそろそろ着くんちゃう？」

「……そうだ」

「とうか、あれが神社だ」

アベールが指差した先に、町の外れにある例の神社——都睦神社とかちが立つ小高い丘が見えてきた。町外れということもあってか、辺りには民家がない。

「本当に10分少しで着くんやねえ。それにしても……」

「雰囲気あんなあ……。それに、あたしみたいな半端者でもそれとわかるくらい、凄く魔力が渦巻いてる」

空子は率直な感想をこぼす。それに対し、アベールはなにが嬉しいのかわからないが笑みを見せた。

「魔力の方はさっぱりだが、ムードについては私らも始めて見た時同じことを言っていた」

アベールは、な？　と言った感じで奥山さんを見たが、彼は無愛想に無視して辺りを窺ってから、車を減速させる。

「この辺りで車を止めるぞ」

「ええ、ここいらでお願いします」

事実上、完全無視されたアベールの渋い顔を見て、空子がさも面白いという風に笑う。

「ククク」

「何がおかしいんだ。蘭田？」

「いや、なんでもないですよ、係長殿？」

……再び話がややこしくなる前に私が止めなければならない。

「じゃれてないで降りる準備し、空子」

「じゃれ……」

「了解であります、課長！」

空子がニヤリ顔をして、腕の周りに装着したスローイングナイフを確認していく。アベールは何故か悔しそうだ。……まあ、いつかのように、しょうもないことで言い合いになるようりは、だいぶマシだろう。

「……それで、アベール係長、奥山さん、しばらくしたら戻ってきますんで、ここで待っていて下さい」

「……わかった」

「了解した」

私は満足して一度頷き、車から降りようとする。

「それでは、お願いします」

そう言って、ドアに手をかけた瞬間、さっきまで肩を落としていたのが嘘のような、真顔のアベールに声をかけられた。

「改めて確認するが、屋敷で渡した携帯電話、二人ともちゃんと持ってるな？」

「ええ」

私は頷く。やはり真顔の空子は無言でポケットから取り出してアベールに掲げて見せる。

「何かあった時は、2・5・8・0・4・＊の順にボタンを押せ。そうすれば……」

「そしたら、飛んできてくれるんやろ？」

アベールがああ、と頷くのと同時に、ガチャという音が車の中に響いた。奥山さんがどこぞに隠していた小さな短機関銃に、マガジンを差し込んだのだ。

「それでは、改めてお願いします」

今度こそ私は車から降りる。空子も続いて降りる。彼女が車のドアを閉めたのを確認すると、私はゆっくりと、それこそもう次のご飯が近いというのに食後の腹ごなしのように歩き出した。

「普通に参道から入んで。あくまで散歩しにきてんねんやからな」
「……了解」

空子の構えた声にびっくりして振り返ると、彼女は敵意しか感じ

させない驚きの形相を見せていた。私は思わず笑ってしまう。

「ふふ、顔、怖いで」

「む、だからって笑うことないじゃん」

「だって、面白いんやから仕方ないやろ。で、神社にいくから怖い顔は仕方ない、というんか？」

「うん、そうさ」

空子は何故か胸を張った。私は余計笑いそうになったが、そこは堪えて説明してやる。

「そんな怖い顔してたら、アンタも車の中で待たせんで？ ……よう考えてみ。神社は不特定多数が出入りする場所や。協会の巫女が自己防衛のために結界を張るにしても、侵入者防止の結界を張るわけにはいかへんし、侵入者を知らせる結界を張るにしても、普通の結界やと参拝人にまで一々反応してやっかいやろ？ となると……」

「敵意や悪意をもつ、侵入者^{ていき}にのみ反応する結界を張ってるはず！」

「そうそう、よう出来ました。……だから、アベール達を置いてたわけや」

「ああ、なるほど」

空子は納得して表情を緩めた。私はそれに一通り満足した後、一度、肩をすくめて見せる。

「ん？」

「まあ、実のところ、武器に反応するタイプの結界かもしれへんし、アンタは感じ取られへんみたいやけど、そこそこの力がある魔術師同士やったら、どうしても漏れ出る魔力とかで簡単に互いにわかりあってしまうもんやねんけどな」

「なんじゃそりゃ！」

私と違って、関西人じゃないというのに、空子のツツコミは中々様になっている。

「と、アホなこと言ってたら、もう最初の鳥居やな。ここ潜ったら、神社の敷地やで」

「了解。……と言っても、そんな風に身構えてちゃ、駄目なんだろ

？」

「そうやな。それやったら、昼食の話でもしながらこの石段上がっていか」

「そりゃ良いや」

私と空子は、12月ということもあって、ほとんど落葉した雑木林が左右に広がる参道の石段を、本当に差しさわりのない世間話をしながら登っていく。聖域の外と内を仕切る鳥居を一つ超えるたびに、魔力が強くなっていくのを私達に感じさせた。

嘘。……正直なところ、私達が一番感じたのは、ここの参道は思いのほか傾斜がきつくて登りづらいということだった。

「やっとなつた」

「まったくやね」

参道を登りきり、田舎にあるには勿体無いくらい立派な本殿の前に到達した時、思わず二人して不満を口にする。もちろん、日頃の鍛錬のおかげで息が上がるなどという見っことも無いことは起きていない。

「やっぱ、参拝したりするのか？」

空子が尋ねてくる。

「そりゃ来た以上わな。けど、その前に確認したいことが」

私はこの立派過ぎる本殿はフェイクだとすぐさま理解すると、脇にあると報告を受けている祠へと向かう。頭に入れた見取り図を思い出すまでもなく、不自然な魔力の流れを感じる方へと足を向けると、そこにはこの神社の本当の神殿であると思われる、小さい地味な祠が立っていた。

「しよっぱい祠だ。本殿を見た後だと余計みすばらしく見えるな」

「そやね。……けれど、この祠こそ、私達が追い求める槍がある場所」

「!？」

私の言っている意味がわからないのか、空子は目を白黒させている。それも当然だろう。なんせ、神話や伝説の存在であり、私達が

命をかけて奪い合う槍が、こんなちんけな祠にあると告げられたのだから。

「難しい話は置いとくけど、言うたら、ここに象徴としての槍があるんや。……そういうことやろ、巫女さん？」

私は振り返り木陰に隠れていた巫女装束の老女――私の第六感が相手は老練な魔術師だと告げただけで、見た目は私と同じか、少し年上かくらいである――に声をかけた。

「気配は隠したつもりでしたが、やはりバレてしまいましたね」

巫女は楽しげに笑みを浮かべて姿を現した。

「アンタさんくらいの魔術師やと、そうそう簡単に気配を隠そうとしても隠しきれません」

私も負けないくらいの笑顔を作る。

「それもそうですね。ま、そんなことはどうでも良いです。……貴女、この祠に納められているモノに、やったら詳しいようだけど、財団の人間ですか？ それもマスターだとか？」

「ストレートな質問ですねえ。……まあ、隠すことでもないんで自己紹介しときましょうかいな。私は欧州神秘考古学財団広報三課の霧島と言います、以後お見知りおきを」

私は体を硬直させている空子に目で自己紹介するよう指示すると、彼女は慌てて、同じく蘭田です、と簡素に名乗った。

「それから、マスターかとの質問にもキチンとお答えしときましょう。蘭田はマスターじゃありません。……私も、まだ、マスターではありません」

まだ、というところを特に強調して私は言った。

「これはご丁寧に。私も名乗らなくてはならないね……。私はこの都陸神社で巫女としてご奉仕させていただいている浅神です。一応秘密だけれど、貴女は貴女方のことを教えてくれたし、知っていると思うので言いますが、私は財団にも認められた、伊美浜の正しい持ち主から委託を受けている、土地管理者代行です」

浅神と名乗った巫女は何か愉快げに、これ以上はないというほど

の——はつきり言って気持ち悪いくらいの笑みを見せる。

「それで、ここには何の用ですか？　自分でまだマスターじゃないと言うだけあって、令呪の兆しがあるようですが、まさかただの参拝客、というわけでもないでしょう？　そんな短剣までぶら下げて」

私は敵前ながら、自分に令呪の兆しがある、という言葉に安堵した。令呪とは、この争奪戦に参加するマスター達の体に浮かび上がってきて、魔術刻印のように機能する、いわば参加証である。これの兆しがあるということは私はキチンとマスターになれるということだ。

財団は——財団本部は知っているのに末端に伝えていないだけなのかもしれないので、本当の所はわからないが——聖槍がマスターを選ぶ仕組みを理解しておらず、私はマスターになるつもりで伊美浜に来たものの、実はマスターになる人間ではありませんでした、という残念なオチを迎える可能性もあったのだが、この巫女の言葉が事実であれば、その最も避けたい事態は回避されそうである。

そう思うと、私は俄然強気になる。

「そのまさかです。この刀は、ちょっとしたお守りで。……まあ、財団のお偉い方は、私らみたいな現場の駒にそこまで詳しく教えてくれませんか、全く参拝目的だけ言うたら、嘘になりますけどな。そういう意味では、浅神さん、アンタさんが自分から出てきてくれはって助かりましたわ」

「そうですか。これは何かの縁でしょう」

私と浅神は相変わらず極上の笑顔を浮かべている。空子が耐えられなくなった様子で、視線を雲で暗くなった空へと向けた。自分で言うのもなんだが、私は笑みに凄みを利かせられるタイプだ。浅神もそういうタイプだ。うん、私が第三者なら、間違いないこんな修羅場に居合わせたくない。

「それで、こん中に槍があるんですか？」

私は祠にチラッと視線を送って尋ねた。

「ええ、貴女自身がさっき言ってたように、象徴としての槍ですけ

どね」

巫女はなんでもないように答えた。これは想定内の範囲だ。隠したところで意味がないのだから。

空子辺りでさえ勘違いしていると思うが、聖槍が人の望みを叶えるのではなく、聖槍に蓄えられた無尽蔵の魔力を使えば、どんな望みを叶えられる、というだけのことなのだ。私も仕組みを理解していないが、争奪戦という儀式的進行と共に聖槍というタンクに魔力が溜まっていく。まだ儀式的の成っていない今、これを奪ったところで全く意味がない。

またもし、槍が魔力でいっぱいになっていたとしても、望みを叶えるためには、槍型タンクに溜まった魔力を放出して、使える形にしてやらねばならない、ということになるのだが、そんなことが出来るのは、霊脈という魔力の溜まり場の上だけで、この神社がこの伊美浜にある霊脈の中で一番良い場所にある。結局、どう転んでも、槍はこの神社にあるのに限るわけだ。

「やっぱりそうですか。答えていただき、ありがとうございます」
私は慇懃に謝意を伝えた後、本当に聞きたかったことを尋ねる。

「……では、もう一つ。争奪戦は、槍に魔力というエネルギーを装填するための儀式やと、私は考えてるわけですが、何故、今更起きたんでしょうか？ 歴史の闇に消えてから50年少し。何か狙ったような気がしませんか？」

「……」

巫女はしばらく考えているように無言でニコニコしていたが、おもむろに口を開いて、わかりきったことを言った。

「単純に封印が解けたからでしょう」

「それは……、そうでしょうね」

心の中で舌打ちをしたが、私はそれを表情に出さずに笑顔で頷く。封印に綻びが発生したから、槍が本来の力を取り戻そうと争奪戦をしかけたというのは、二課の報告からも明らかだ。私が知りたかったのは、今更になって封印が綻んだのは何故か、あるいは誰が何の

ために封印を綻ばせたか、もつというところ、財団本部が教えてくれない財団の敵対者のことなのだ。

別の角度で攻め込んでみることにする。

「……にしても、八神でしたっけ？　ここの本来の土地管理者は、酷い人達ですねえ」

「はい？」

巫女は、鳩が豆鉄砲を食らったように驚いた表情を見せた。

「せっかく、どんな望みも叶えられるという槍をたなぼたで手に入れたというのに、それを使って、自ら根源に迫ろうとせえへんかったんでしよう？　それは魔術師にあるまじき行為やと思いませんか？」

巫女、浅神の表情が硬くなっていく。これは面白い。

「こと先代は、魔術師の風下にも置けないような男やと、私は思います。伊美浜の土地管理者としての地位を貴女に譲ってさっさと他界して、一族を遠ざけて……」

巫女は怒ったように肩を震わせて反論する。

「でも、聖槍は危険なものですよ。そんな危険なものをです……」
「危険、ですか？　魔術師をやっている時点で、棺桶に片足を突っ込んでいるようなもんやないですか。だというのに危険やからと、根源に迫る機会を自ら潰すなんて、魔術師の片隅にも置けないヘタレやと思いませんか？」

「ヘタレ!？」

「ええ、ヘタレです。魔術師である以上、いや男である以上は……」
あれー、論点がズレて来たな、と思っていると、私の背後で何かが崩れていく嫌な音と、空子の祠が！　という声が入ってきた。
「おもいのほか沸点低いんやな……」

私は驚いて、我ながら意味のわからない呟きをしながら、コートポケットから懐剣を取り出す。巫女は、さっきまでの笑顔が嘘のような、怖い顔をして吼えた。

「それ以上、三言さまを侮辱させない！」

タツという地を蹴る音がして、右手に財団支給の特殊アーミーナイフ、左手に三本のスローイングナイフという、魔術戦装備の空子が、長い髪を揺らしながら私を庇う様に立った。

「……いいって言うまで、攻撃したらあかんで」

「……命令は出来るだけ守るとも。うん、出来るだけ、だけど」

ここから空子の表情は見えないが、少し怯えているようだ。なんせ、相手はなんの補助器具も、呪文の一小節も、そしてなんのモーションもなしに祠を物理的に壊してしまったのだ。これがただの魔術だというならば、この敵は尋常じゃない。

「流石に協会から土地管理者の代行を任せられるだけあるんやね。立場が立場でなかったら、私、アンタさんに弟子入りしてたわ」

巫女は聞く耳持たず、敵は滅殺！ という顔で、旧教の代行者と呼ばれる者達が使う、黒鍵とかいう投擲を主目的とする、杭のように長い剣をかざす。空子も迎え撃つ気で、アーミーナイフの刀身をちよつとした短剣くらいに長くした。この財団のナイフは、ただのアーミーナイフじゃない。黒鍵もそうらしいが、刀身は魔力で編まれている、刀身を物理的に出したり消したりすることが出来る。しかも、黒鍵と違ってこのナイフは、ヒトラーが編み出した術式とかなんとかで、自由に刀身の長さを変えられるという代物だ。

「まあ、待ち浅神さん。アンタさんは私達をここで殺す気らしいけど、それは愚策というもんやで。……まだサーヴァントを召喚しきっていないマスターを倒しても、何の価値もないんちゃう？」

「……」

正直なところ、今さっきやっと、自分はマスターになれるという確信を得た私だけに、これはハツタリなのだが、巫女の腕はピタッと止まった。とりあえず、畳み掛ける。

「それにな、自分で言うのもなんやけど、私は財団の中では、まだ話のわかる方や」

「……」

木枯らしが吹く。なにかの映画のワンシーンのような緊迫した時間

がしばし訪れたが、それはあっけなく終わった。

「……チッ、貴女の言う通りだね」

巫女は、おおよそ神職に相応しくない大きな舌打ちをして、得物を納めた。

「わかってもらって幸いや」

「……」

巫女はそっぽを向く。私は厭味にならないほどの笑顔を作って、アーミーナイフは直したものの、まだスローイングナイフをいつでも打ち出せるように掌にセットしている空子を押しのけて、巫女に近づく。

「とりあえず、今日は知り合えて良かったです」

右手を差し出すがその手は握られなかった。代わりに巫女は、貴女はなんのためにこの地に来たのと、ふざけたことを私に尋ねた。

「槍を求めています。それ以外、理由があります？」

そっぽを向いていた浅神の顔が私の顔を見据える。

「私にはそう思えないね。……だいたい、財団のマスター達はどんなに頑張って聖槍を手に入れても、ヒトラーの復活なんて言う、馬鹿げたことの為に使われてしまうわ」

「財団員は皆、総統の復活を望んで……」

「それ嘘でしょ」

「……」

私は反論できずに黙る。空子も何も言わない。

「ほらね」

巫女はさっきまでの怒りが嘘の様な優しい微笑を浮かべる。そんな彼女が何故か全知全能の存在のように私に目に映った。だから私は、告解するような面持ちで、本心を告げる。

「ただ手に入りたい、それだけやおかしいですか？」

神父、もとい巫女は一度キョトンとした後、クスクスと笑い出した。

「貴女、凄く変わってるね。……なにか歪だよ」

「歪？」

「そう、歪。つまり、歪んでる」

私は久々に下された自分の評価に戸惑って、何も言えない。

「だってさ、望みを叶える手段として、多くの人は槍を求めているわけだけど、貴女は、望みとして槍を求めているんでしょ？　それは普通の逆。よくわからないけど、槍の入手が貴女の全てなんだね」
槍の入手が貴女の全て、という言葉が自分の胸に凄く引っかった。けど、それは気取られたくない。だから、今度は私の方がそっぽを向く。

「……そうかも、しれませんね」

そして、私の背中を守るようにしていた空子に声をかけた。

「そろそろ帰ろうか」

「……了解」

空子は何かに気にしたように了承の意を告げた。それが何か私は理解していたが、敢えて気にしないで、巫女に別れの言葉を告げる。

「では、今度こそ、失礼します」

「ええ、またどこかで会いましょう。……もったも、その時には、絶対に三言さまを侮辱したケリをつけさせて貰いますが」

「それはどうでしょう」

巫女は割合に本気の様子だったが、私は軽く受け流して彼女との距離をとった。それから、さっき空子が気のしていたモノーというわけか、巫女との会話の途中から、私達の話はずっと盗み聞きしている、不届き者の魔術師が潜んでいる陰に、視線をチラッと向ける。まったく、そこそこ能力のある魔術師同士だと、漏れ出す魔力のおかげで、簡単に分かり合ってしまうというのに……。木陰への隠れ方としても、巫女の数倍下手くそで、そんな芸当の出来ない空子にも、単純な洞察力でバレてしまっているのだが。

仕掛けてくるとしたら今だろうと思っていると、案の定、西洋人にしても肌の白過ぎる少女が飛び出してきた。

「トレース・オン！」

その飛び出してきた少女は威勢良く呪文を唱え、火球を五つほど飛ばしてくる。が、予知していた私達に当たるはずもない。私は身のこなしだけでかわしながら、その少女に問いかける。

「お嬢ちゃん、盗み聞きも十分性質悪いけど、その上いきなり攻撃呪文浴びせるなんて、性質悪すぎやで？ 巫女さん、貴女のお知り合い？」

「……否定したいけど、お知り合い」

巫女は肩をすくめながら答えた。

「なによ！ 否定したいけど、って！ このエセ巫女！」

巫女の答えは少女の癪に障ったようで、少女は吼えたが、巫女は涼しい顔だ。

「はいはい、それでマルゴットは何の用？ 私は君に少し待っていて、と言った筈だよ。盗み聞きはよくないわ」

巫女は咎めるように言う。だが、マルゴットと呼ばれた少女は反論する。

「財団の人間は敵だから倒せ！ とさっき貴女自身が言ってたじゃない。だから私、倒そうとしているのよ」

「そうだね、確かに私、さっきはそう言ったね。けど今は、この人を倒すべきじゃないよ」

「何でよ！ 今こいつ、サーヴァントを召喚しきっていないって言うてたじゃない。今こそ絶好のチャンスじゃない！ 今を逃したら、いつがあるっていうの」

「サーヴァントを召喚しきってないから、倒しちゃ駄目なの。説明してあげるから、一度落ち着きなさいな」

巫女が、マグリットと呼ばれた少女を見据えたかと思うと、彼女は風に舞う木の葉のように、くるくると回った後、地面に背中から倒れこんだ。

「いったーい！」

「だろうね」

巫女はマグリットにずんずん近づいていく。だが、恐らく巫女の

魔術で倒された当のマグリットは、浅神の言うことを聞く気がないようだ。

「もー、腹立った！ セイバーちゃっちゃとやっちゃって！」

「ったく、あのバカ娘！」

巫女は苦々しげに舌打ちした後、足を止めて振り返り、サーヴァントが来るわ、と私達に告げた。

「……げ、あの子マスター？」

空子が素っ頓狂な声を上げる。

「そうよ」

「魔術の才能は、年齢やその見た目に関係せえへん教えたやろ」

「あっそうか、って、わ！」

空子が大声を上げながら横っ飛びしたのを見て、私は反射的に身を伏せる。するともの凄い風が私の頭上を吹き抜けていった。

「ちっ、外れた」

慌てて状況を確認すると、いつの間にか現れた二メートル以上もある大男の足先が、私の上を通っていったようだ。この男の長い足のおかげで、赤く塗られた石灯籠が、運悪く当たってなぎ倒される。

「外れた！ じゃないでしょ、セイバー！ ちゃんとやんなさい！」
マグリットは怒鳴る。

「もう、全く！」

それを打ち消すように巫女は大声を出したが、剣の英霊は無視して、退屈そうに剣を構えた。私達は後退して、この大男を睨む。

「へいへい。……我が王の命令だ。^{マスター}悪いが死んでくれると助かる」

覚悟を決めたほうが良いのかと、私は、腰に下げた霧島秘蔵の短剣に手を伸ばした。

この短剣も、懐剣同様に、魔術礼装と呼ばれるものの一つだが、持ち主を総合的にサポートする魔杖とはまた別の役割をもつ、限定魔術礼装と呼ばれるものだ。「限定」と名前につく通り、この種の魔術礼装は一つの魔術を行使するためだけに特化した術式のようなもので、所有者はこれに魔力を流すことで、難しい高度な魔術が発

動することができる。この短剣の発動できる魔術は、水の“操作”、まあ、簡単に言えば水の状態変化で、今日のように曇っていて水分の多い日には、空気中の水蒸気を液体化させ、水壁を作ったり、目くらましの霧を発生させることが出来る。今日私が、強気に神社へやって来たのも、これがあつたからだ。

「……空子。想定4－Aや。わかるな？」

「魔術による逃避か。了解。……で、反撃の許可は？」

空子も覚悟を決めていたようで、彼女の手に再び握られたアーミナイフは、すでにナイフと呼べない長さになっていたが、私は首を横に振った。

「……了解」

空子はサーベルのようになったナイフを下段にする。セイバーにもそれが、戦う意思がないと理解したようだ。

「サーヴァントという対抗手段をまだ持っていないマスターを殺すというのは、結構、忍びないからよ……。出来たら思いっきり抵抗してくれると、殺しやすくて助かるぜ」

セイバーはなかなか物騒なことを言っただけを握り直したかと思うと、一息で間合いを詰めて、思いっきり剣を振るう。豪快な斬撃だったが、その分散漫としていたもの、私達は体術だけでかわす。

「ほー、ただの魔術師かと思ったが、結構出来るようだな」

別に見事な回避だったというわけでないが、セイバーは感心したように言うと、これはどうだと、今度は横に剣を風ぐ。

「くそ！」

避けれないと判断した空子が、胸の前でクロスさせたアーミナイフとスローイング・ナイフで、後ろに飛びながら受け止めた。空子はなんとかこけずに踏みとどまり、逆に男の剣を跳ね返す。

「こりゃ、腕が痺れたるなー」

空子は大男にニヤリ顔を見せる。空子は何を思っただんなことをしたのかわからないが、セイバーもニヤリ顔になって、空子に話しかける。

「凄い度胸だな、お前」

「そりゃ、どうも」

「怖くないのか？」

「怖いさ。けど、死ぬわけにゃ、いかないからな」

風が吹き、空子の長い髪が揺れる。セイバーはガハハと豪快に笑って空を仰ぐ。

「お前は良い女だ。俺の女もとんでもなく肝っ玉の据わった良い女だったが、アイツのことを思い出すぜ」

しばらく境内に、セイバーの笑い声だけが響いていたが、不意に、我に返ったマルゴットの怒号が響いた。

「ちよっと、セイバー！ 何やってるの！ さっさと倒せって言ってるじゃない！」

「お？ おう」

セイバーは笑うのをピタリと止めて、剣を構えた。もつとも、練られた気は私達^{マスター}に向かっていない。

「ところで我が王、気が付いているか？」

「何をよ？」

マルゴットは、本当に何を言っているかわからないという風に、可愛らしく首を傾げた。

「まったく……」

セイバーはため息混じりに小さく呟く。私は思わずセイバーに同情して声をかける。

「なるほど、マスターが頼りないと、サーヴァントが苦勞するんやね」

「そうさ。お前もマスターになるなら、自分のサーヴァントに負担かけさせないように気をつけてやれよ」

「ちよっと、それどういうことよ！」

マルゴットが三度吼えたと同時に、セイバーが大声で、マスター齒を食いしばれ！ と叫ぶ。

「あの巫女、容赦ねーな」

「えっ！ きゃ！」

空子の感嘆に近い驚きの声と、マルゴットの悲鳴が入り混じった驚きの声はほぼ同時だった。さっきから姿が見えなかった浅神が、マルゴットに体当たりして吹き飛ばす。少女の軽い体は私達の頭上を越えて、半壊状態の祠にぶつかって止まった。

「あいたた」

マルゴットは打ち所が良かったらしく、意識はおちていない様だが、立ち上がることも出来ないらしく、座ったまま腰を擦る。

「大丈夫か、マスター」

セイバーは驚きの表情で巫女を見据えながら、立てない自分の主に問いかけた。

「うー、まあ、なんとかね」

その声にはさっきまでの覇気などなく、辛そうだ。

「そうか」

セイバーは巫女に向かって剣を構える。

「アサガミ。一応、確認するが、マスターの勘違いを諭すための振る舞い、ということの良いのか？」

「そうだよ、セイバー。君の協力には感謝する」

セイバーは何も言わず、さっきの演技の比ではないほどに練られた気を巫女にぶつけるが、巫女は表情を変えない。

「君は私に対して、やりすぎだと抗議しているみたいだけど、それはお門違いというものだよ。それよりほら、マルゴットは自分で立てないみたいだから、彼女の騎士として助けてあげたらどうなの？」

巫女も悪びれた様子もなくそう言い切ると、セイバーは一度、ギリリと歯を鳴らしたが、巫女の言葉に従い、テディーベアよろしく両足を前に放り出して祠の残った壁に背中を預けるマルゴットに近づき、肩を貸して彼女を立たせようとする。

「ありがとう、セイバー」

「ふん。……礼を言っている暇があれば、こんな手間をかけさせない方法でも考えてくれや」

マルゴットは貸された肩に体重をかけてなんとか立ち上がるが、やはり腰を強く打ったらしく、足取りがおぼつかない。

それを見て私はつい思ってしまった。

「なんとなくやけど、嫌な予感がせえへんか？ 巫女さん」

「そう、ですか？」

私が巫女の答えを聞いた時、やはり心配していた不幸が起きた。

ふらついたマルゴットが、半壊状態の祠に手を付いた。それだけなら問題なかったのだが、よりによって彼女が腕を伸ばしたのは、辛うじて立っていた梁の一部だったのだ。

「きゃー！」

「うお！」

半壊だった祠が全壊になる音と、下敷きになる二人の驚きの声だけが私達の耳に届く。

「……」

「……」

「……」

「……大丈夫なのか、あの娘？」

「……大丈夫やろう。英霊ついてるんやし、多分」

「……ええ、それも最良のサーヴァント言われるセイバーですから大丈夫です、多分」

私達三人は意味もなく笑い合う。

＊

「結局、お参りできへんかったなあ」

「あ、そういや！ でも、今更戻る気には、ならないね」

「ええ、まったくやわ」

私達は参道の最後の鳥居を潜り、神社の敷地から出る。あの後、予想通りにセイバーが、気絶した少女を腕に抱きながら這い出て来て、巫女がマルゴットの介抱することになり、私達は追い返されたのだ。まあ、もとより長居する予定でなかったし、こんな長居することになるとは思っていなかったが。

「それで、空子、なにか感じたことあった？」

「そうだなー、マグリットだっけ？ あの女の子、相当不幸体質なんでしょうね。後、セイバーは私達と戦う気なんて、最初から毛頭なかった。それこそ禿げ散らかした部長の頭の毛ほども」

「いやまあ、それは私もそう思ったけど……。神社のことを私は聞いたつもりやったんやけど」

「あっ、そっちな」

空子は大仰に驚く。

「うーん。聖域である神社の中と外じゃ空気が違うのは当たり前。全国どこだってそうだけど、ここはまた格別だったね」

空子は伸びをして天に向けた自分の指先を見上げながら言う。

「そうやね。……なんかそれは、ただ霊脈上やったから、あるいは、そこに聖槍があったからというんと、また別の理由があった気がするわ」

「？」

空子は私の言葉の意味がわからないようだ。まあ、言った自分自身、よくわかっていなだけれど。

「あれ？ 手の甲から血が出てる」

空子が驚いた声を上げる。てっきり私は空子のことかと空子に方を向くと、何故か彼女は私の方を心配そうに見ていた。

「どうしたんや？」

「どうしたんや？ じゃなくて、先輩の右手。そんなに出血しているのに、気が付かなかったのか？」

言われて見ると、確かにだらんと赤い血が指先まで流れ、地面に滴り落ちていた。

「切った覚えはないんやけどなあ……」

本当に覚えのない私は、首を捻る。

「それ痛くないのか？」

とりあえず私はハンカチを当てた。

「全然痛くないで。だから気が付かんかったんや……」

「そんな血出てたら、普通激痛が走ると思うけど」

言われて私はあることに気が付いた。

「ああ、なるほどなあ」

「うん？」

「いんや、なんでもないわ。……車に救急箱あるから、包帯巻いてな」

「……了解」

空子は何か聞いた気だったので、私は後で説明してやるというな事を言うと、ひとまず満足したような表情を見せた。

「いよいよやねんな」

私は胸の高鳴りを感じながら、車へと急ぐ。

第二話 魔術師“敵”と出会う（後書き）

ペース遅いです。申し訳ないです。

それから、この場を借りてこの様なことを書くのは、正しいかどうかわかりませんが、このたびの東北・関東大震災で被災、あるいはそれに端を発する福島原子力発電所問題で疎開された方々へ、書かせていただきます。

本日（2011. 4. 1）であの大地震から三週間が経過しましたが、多分、復興に向かって動き始める、これからが一番物心共に辛いと思います。けれど、くじけないで頑張ってください。生きている限り、今回の不幸を超える幸せが、きっと与えられるはずなので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9169q/>

Fate /~ Lance of Longinus~ アナザー・サイド

2011年4月1日21時10分発行